

## 2022年度 研究センター事業報告書

研究センター名	地域健康社会学研究センター
---------	---------------

**I. 研究成果の概要（公開項目） ※1ページ以内にまとめること**

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、項目立てなどをおこなうだけでわかりやすく記述してください。

**1. 地域健康社会学プロジェクト研究の推進**

寄付研究プロジェクト（2016年4月発足）時の主旨を引き継ぎ、住民の参加・協働による地域健康創出をめざす基礎的研究、歴史・実践研究、現状分析・方法開発の総合的な研究を行った。予防要因分析を通して政策構築に資する疫学研究の手法を用いて健康創出の社会的課題を明らかにしてきた。

2022年度の主な取り組みは、2020年度に当センターと滋賀県健康医療福祉部と協働で実施した滋賀県国民健康保険加入者の健康福祉データ分析（5年間の国民健康保険医療費データ、国保特定健康診査データ、介護保険受給データを使用したコホート研究）をもとに、県保健事業部会において、県下全市町へフィードバックを行った。

特に、この分析結果をもとに、滋賀県健康医療福祉部は、次期データヘルス計画策定に向けた標準化の検討する資料として活用している。県は新たにデータを統括して市町ごとに健康チャートを作成する事業を計画している。センターからのフィードバックは、単に公衆衛生学的知見にとどまらず、社会格差、地域格差、社会資本等の「社会的要因」も含めた地域健康社会学の視点も含めている。

地域健康の歴史と実践として、認知症の人と家族の会において、認知症は特別な病気ではなく、人生の延長線上にあるものという捉え方で、健康課題を「自分ごと」と捉える視点を検討している。家族の会も設立から40年以上経ち、会員の世代交代や、社会における認知症への理解も変わってきており、時代にあった視点を検討している。

福島県での地域健康づくりについては、引き続き郡山市保健所とともに、地区診断、健康格差について分析、評価を行った。

**2. 外部資金獲得の推進**

センターの運営資金として寄附金を保有するほか、厚生労働行政推進調査事業費補助金を獲得している。また、個別の研究課題推進のため、科研費への申請も積極的に行った。センター長の早川が滋賀医科大学との共同研究を行い、疫学、公衆衛生学の観点から地域医療の可能性を模索するとともに、産学官連携や外部資金の獲得を見据えた研究を行った。

全国から無作為抽出した対象者を追跡したコホート研究において、社会的要因に関する分析研究を行っている。

**3. メディア媒体を使用した発信及び社会貢献**

センターウェブサイト、ソーシャルメディアにおける積極的な発信を行うとともに、各メディアの特性を生かした独自の情報発信についても工夫や分析を行い、より効果的な情報発信に努めた。KBS 京都ラジオにおいて、月に一回、健康や地域、公衆衛生学に関連した話題提供を生番組で社会に伝えており、リスナーさんともやり取りを行っている。テーマは生活習慣病から地域保健、健康格差を挙げており、関心を高めてもらうよう働きかけている。

また、当初より取り組んでいる地元ラジオ局の番組について、引き続き小学生目線で観た地域の高齢者への作文を発信した。これらの作文を蓄積し、また、地域における高齢者の存在意義を抽出していくことで、高齢者・子ども・地域の役割を明らかにし、地域社会への貢献と研究素材の抽出を相互に行った。また、ラジオ番組での取組みを契機に小学生への出前授業を行い、日本の高齢化問題に対する相互理解を深めた。

2022年度も、2020～2021年度に引き続き、感染拡大し、その後収束してきた新型コロナについて、読売新聞からの取材を数回受け、社会状況を鑑みながら公衆衛生学的視点からコメントを行った。

**4. その他研究活動とその展開**

滋賀県は全国平均寿命都道府県ランキングで日本有数の長寿県である。2017年度より、滋賀県衛生科学センターから「滋賀県データ活用事業プロジェクト会議」メンバー（座長）の就任依頼を受け、健康や医療、介護など滋賀県健康寿命延伸のための各種データを一体的に分析・活用し、市町や件における予防的な取組みの推進を図っている。

滋賀県健康医療福祉部医療保険課が県下市町に実施している、国民健康保険運営方針等検討協議会保健事業部会で学識経験者として参加し、運営方針に対して助言を行っている。

2018年度から滋賀県草津保健所の「県南地域みんなでコラボ」事業に携わっており、働き盛りや住民の健康をまもるために、県南地域の地域・職域の枠を超えて連携を具体化していく事業であり、その座長を務めている。

また、京都市下、福島市を始めとした自治体にて、「地域に責任を持った保健活動の強化」をテーマとして講師を務めるなど、各種団体における講演依頼や委員委嘱依頼を積極的に受け、研究の今後の展開につなげている。

## II. 拠点構成員の一覧（公開項目）※ページ数の制限は無し

本欄には、2023年3月31日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員研究員等の構成員を全て記載してください。区分が重複する場合は二重に記入せず、役割が上にあるものから優先し全て記載してください。また、若手研究者の条件に当てはまる場合は、必ず若手研究者欄に記載をしてください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③大学院生、④日本学術振興会特別研究員(PD・RPD)

役割	氏名	所属	職位
センター長	早川 岳人	衣笠総合研究機構	研究教員（教授）
運営委員	中村 正	産業社会学部	教授
	松田 亮三	産業社会学部	教授
	サトウ タツヤ	総合心理学部	教授
	岡田 まり	産業社会学部	教授
	山口 洋典	共通教育推進機構	教授
学内教員 (専任教員、研究系教員等)			
学内の若手研究者	専門研究員 研究員 初任研究員		
	補助研究員・リサーチアシスタント		
	大学院生		
	学振特別研究員 (PD・RPD)		
その他の学内者 (非常勤講師・研究生・研修生等・ 博士前期課程院生等)			
客員協力研究員	大倉 和子	明治国際医療大学看護学部看護学科	講師
	富澤 公子	立命館大学産業社会学部	非常勤講師
	日高 友郎	福島県立医科大学	講師
	西沢 いづみ	京都中央看護保健大学校	講師
	小田巻 友子	立命館大学経済学部	准教授
その他の学外者 (他大学教員・若手研究者等)			
研究所・センター構成員	計 11 名	(うち学内の若手研究者 計 0 名)	

**Ⅲ. 研究業績（公開項目） ※ページ数の制限は無し ※to be published,の状態の業績は記載しないで下さい。**

本欄には、「Ⅱ. 拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。（2023年3月31日時点）

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	中村 正	『どうして男はこうなんだろうか会議』の第3章「男性性と暴力ーコミュニケーションに潜む加害と被害の両面から考えるー」	共著	2022年8月	筑摩書房	澁谷知美・清田隆之編/西井開・中村正・平山亮・前川直哉・武田砂鉄	PP. 101~137
2	中村 正	『災厄を生きるー物語と土地の力』	共著	2022年7月	国書刊行会		PP. 229~258
3	中村 正	マスクユニティーズー男性性の社会科学ー	共訳	2022年5月	新曜社	伊藤公雄訳／中村正・多賀太らと共同訳	
4	サトウ タツヤ	Sayonara Variable, Konnichiwa Equifinality Point: Semiotic Cultural Psychology Teaches Us What Colorful Really Means	共著	2023年4月	Information Age Publishing	©Tatsuya Sato, Yuko Yasuda, Misato Fukuyama, Daina Ishii, Ayae Kido, Yasuhiro Omi, and Yoshiyuki Watanabe	
5	サトウ タツヤ	心理学からみた評議の会話分析研究	単著	2023年3月	日本評論社		
6	サトウ タツヤ	カタログ TEA	共編者	2023年2月	新曜社	サトウタツヤ・安田裕子（監修）	
7.	サトウ タツヤ	TEA as a Proposal for Translation Between an Idiographic Approach and Nomothetic Approach,	共著	2023年1月	Information Age Publishing	Tatsuya Sato and Misato Fukuyama	
8.	サトウ タツヤ	心理検査マッピングー全体像をつかみ、臨床に活かす	共編者	2022年9月	新曜社	鈴木朋子・サトウタツヤ	
9	山口 洋典	「まちづくりの学を求めて」『ギブ&ギブ、おせっかいのすすめ =Let's Give it a Try= ー鳥取県智頭町 地域からの挑戦ー』	監修	2022年6月	今井出版	寺谷 篤志（編著）、吉永 崇史（考察）、木田 悟史（書評<書籍内所収>）、山口 洋典（監修）	PP. 245~259

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	早川 岳人	Predictors of lower limb fractures in general Japanese: NIPPON DATA90	共著	2022年2月	Plos One	Yoshino Saito, Katsuyuki Miura, Hisatomi Arima, Takehito Hayakawa, Naoyuki Takashima, Yoshikuni Kita, Nagako Okuda, Akira Fujiyoshi, Toshiyuki Iwahori, Naoko Miyagawa, Keiko Kondo, Sayuki Torii, Aya Kadota, Takayoshi Ohkubo, Akira Okayama, Tomonori	17(2):e0261716. doi: 10.1371	有

						Okamura, Hirotsugu Ueshima : NIPPON DATA90 Research Group		
2	早川 岳人	Smoking habit is associated with impaired long- term quality of life in elderly people: a 22-year cohort study in NIPPON-DATA 90.	共著	2022 年 10 月	Journal of Epidemiology	Liu YW, Okamura T,, Hirata A, Sato Y, Hayakawa T, Kadota A, Kondo K, Ohkubo T, Miura K, Okayama A, Ueshima H, for the NIPPON DATA90 Research Group.	JE-2022- 0226.R1	有
3	早川 岳人	Effect of diabetes and prediabetes on the development of disability and mortality among middle-aged Japanese adults: A 22-year follow up of NIPPON DATA90.	共著	2022 年 11 月	J Diabetes Investig	Tran Ngoc Hoang P, Kadota A, Yano Y, Harada A, Hayakawa T, Okamoto S, Miyagawa N, Kondo K, Okukda N, Kita Y, Okayama A, Fujita Y, Maegawa H, Miura K, Okamura T, Ueshima H; NIPPON DATA90 Research Group.	1897-1904. doi: 10.1111	有
4.	中村 正	加害者の変容可能 性をひきだすため の対話	単著	2023年2 月	精神看護出版, 精神科看 護, 59 (3)		PP. 23~29	招待
5.	中村 正	臨床社会学の方法 (39)脱暴力支援のグ ループワークとケ ースワーク	単著	2022 年 12 月	対人援助学会, 対人援助 学マガジン, 13(3)		PP. 22~31	
6.	中村 正	臨床社会学の方法 (38)暴力・性暴力の 連続体	単著	2022年9 月	対人援助学会, 対人援助 学マガジン, 13(2)		PP. 21~29	
7.	中村 正	加害行為研究の視 界ー加害性、暴力 性、暴力の文化、マ イクロアグレッシ ョンー	単著	2022年7 月	青土社, 現代思想, 50(9)		PP. 33~46	招待
8.	中村 正	臨床社会学の方法 (37) 男性学のす すめーConnell『マス キュリニティーズー 男性性の社会科学』 刊行の意義	単著	2022年6 月	対人援助学会, 対人援助 学マガジン, 13(1)		PP. 20~28	
9.	サトウ タツヤ	高校生のキャリア 展望と「総合的な探 究の時間」の関係ー TEA(複線径路等至 性アプローチ)と関 係学による検討	共著	2023年2 月	京都光華女子大学, 京都 橘大学研究紀要, 49		PP. 171~193	
10.	サトウ タツヤ	A Case Study of Transductive Resolution: Analyzing the Practice of Inclusive Education for a Girl with down's Syndrome at an Elementary School in Japan	共著	2022 年 12 月	Sage , Integrative Psychological and Behavioral Science,	Kanzaki, M., Kato, H. & Sato,		有
11.	サトウ タツヤ	Career decision- making as dynamic semiosis:	共著	2022 年 12 月	Sage , Culture & Psychology	Tschuchimoto, T., & Sato, T.		有

		Autoethnographic trajectory equifinality modeling.						
12.	サトウ タツヤ	チームで探究活動を行う生徒から見た総合学習の促進要因と課題(1)ー京都府立鳥羽高校のイノベーション探究Iの実践からー	共著	2022年 12月	京都光華女子大学短期大学部, 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要, 58	乾明紀・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・宮崎雄史郎・ミューリニコラス・久保友美・杉岡秀紀・高野拓樹・サトウタツヤ	PP. 123~141	有
13.	サトウ タツヤ	未必的殺意の説示と理解の過程; 模擬評議の質的分析を通じて	共著	2022年 11月	日本評論社, 法と心理, 22	杉本菜月・サトウタツヤ	PP39~46	
14.	サトウ タツヤ	TEA は家族心理学に貢献できるか	単著	2022年9 月	日本家族心理学会, 家族心理学年報, 40		PP149~157	招待
15.	サトウ タツヤ	対人援助学&心理学の縦横無尽(34)	単著	2022年9 月	対人援助学会, 対人援助学マガジン, 50			
16.	山口 洋典	PBLの風と土:(24)よりよい地域のために大学は地域と共に	単著	2023年3 月	対人援助学会, 対人援助学マガジン, 13(4)		PP. 176~181	
17.	山口 洋典	『物語』を届け続けた10年が辿り着かせてくれた現在とこれから-企画セッション「物語を届ける」を通じて-	共著	2023年2 月	国際ボランティア学会, ボランティア学研究, 23	団 士郎、上野知子、山口洋典	PP. 33~42	招待
18.	山口 洋典	コロナ禍における居場所づくり: 越境知としてのボランティア学を求めて	共著	2023年2 月	国際ボランティア学会, ボランティア学研究, 23	坂中俊介、蔵田 翔、佐藤すみれ、山口洋典、横関つかさ	PP. 43~53	招待
19.	山口 洋典	コロナ禍の中で迎えた東日本大震災からの10年に思いを馳せて-特集「越境知としてのボランティア学」の企画趣旨	単著	2023年2 月	国際ボランティア学会, ボランティア学研究, 23		PP. 3~6	招待
20.	山口 洋典	ポスト COVID-19における越境的支援のかたち-否定しない/学び続ける-	共著	2023年2 月	国際ボランティア学会, ボランティア学研究, 23	今井紀明、宗田勝也、山口洋典	PP. 7~19	招待
21.	山口 洋典	再論・大学と震災とボランティアセンター: 国際ボランティア学会第23回大会トークセッション	共著	2023年2 月	国際ボランティア学会, ボランティア学研究, 23	川原直也、八重樫綾子、赤澤清孝、其田雅美、山口洋典	PP. 21~32	招待
22.	山口 洋典	第23回国際ボランティア学会大会報告	単著	2023年2 月	国際ボランティア学会, ボランティア学研究, 23		PP. 125~130	招待
23.	山口 洋典	PBLの風と土:(23)協力的な関係にて学びと成長の旅仲間	単著	2022年 12月	対人援助学会, 対人援助学マガジン, 13(3)		PP. 166~171	
24.	山口 洋典	PBLの風と土:(22)大学と地域が共に見上げる北極星として	単著	2022年9 月	対人援助学会, 対人援助学マガジン, 13(2)		PP. 209~214	

25.	山口 洋典	PBLの風と土：(21) 自己と社会の關係 性を市民性向上で 醸成	単著	2022年6 月	対人援助学会，対人援助 学マガジン，13(1)		PP. 207～212
-----	----------	--	----	-------------	----------------------------	--	-------------

3. 研究発表等							
No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名		
1.	松田 亮三	普遍医療給付の徹底に向け た課題 医療機構論からの 検討	2022年10月	貧困研究会第15回研究大会			
2.	松田 亮三	刑事収容施設の医療体制— 欧州を中心とした公衆衛生 アプローチの国際的動向	2022年10月	第81回日本公衆衛生学会総会			
3.	松田 亮三	刑事施設における医療の同 等性を担保するための政策 欧州の議論と取組み	2022年7月	日本刑法学会関西部会令和4年度夏期 例会			
4.	サトウ タ ツヤ	A Proposal for the Usefulness of a Cross- Check Table of Period Classification and individuation Processes in TEM -From Interviews with Three Self-made Cosplayers	2023年1月	The 5th Transnational Meeting on TEA	Misato Fukuyama and Tatsuya Sato		
5.	サトウ タ ツヤ	Personal culture analyzed in the "garden task" -The example of the Japanese garden-	2023年1月	The 5th Transnational Meeting on TEA	Megumi Nishikawa ・ Teppei Tsuchimoto ・ Tatsuya Sato		
6.	サトウ タ ツヤ	The Longitudinal Study of carriers using TEA	2023年1月	The 5th Transnational Meeting on TEA	aiyo Miyashitao ・ Tatsuya Sato		
7.	サトウ タ ツヤ	The relationship between carer prospects of high school students and Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study	2023年1月	The 5th Transnational Meeting on TEA	Akinori Inui and Tatsuya Sato		
8.	サトウ タ ツヤ	コスプレイヤーの個体化 (individuation)のプロセス とは	2022年10月	第29回日本質的心理学会	福山未智・隅本正友		
9.	サトウ タ ツヤ	模擬裁判員裁判における裁 判官と裁判員の關係変容	2022年10月	第29回日本質的心理学会	杉本菜月・サトウタツヤ		
10.	サトウ タ ツヤ	三名の自作派コスプレイ ヤーへのインタビューから遊 びの発達プロセスを検討す る	2022年10月	第1回TEAと質的探究学会	福山未智・隅本雅友・サトウタツヤ		
11.	サトウ タ ツヤ	男子大学生の生理に対する 理解-会話分析・発生 of 三層 モデルによる検討	2022年10月	第1回TEAと質的探究学会	門田菜々・土元哲平・サトウタツヤ		
12.	サトウ タ ツヤ	統合された個人的志向性 (Synthesized Personal Orientation ; SPO) の検討	2022年10月	第1回TEAと質的探究学会	市川章子・小田友理恵・サトウタツヤ		
13.	サトウ タ ツヤ	History of Quality Psychology in Japan	2022年6月	The Society for Qualitative Inquiry in Psychology, Annual Conference	SATO, Tatsuya & OMI, Yasuhiro		
14.	サトウ タ ツヤ	「磁場」効果の心理的機能； 立会い弁護人の心理的効果	2022年5月	第100回刑法学会			
15.	山口 洋典	地域と大学の連携で「つな がる」を越えて何を目指す のか？—日本語学習支援・ 多文化交流における地域と 大学の変容型パートナーシ ップに向けて—	2023年3月	言語文化教育研究学会第9回年次大会	北出慶子、澤邊裕子、中川祐治、早矢仕 智子、遠藤知佐、西村聖子、川田麻記、 牧田東一、佐藤弘子、山口洋典		

16.	山口 洋典	実験・実践のリアリティと社会のアクチュアリティ：再現可能な一般性の発見と個別性からの普遍性の追求のあいだで	2022年9月	日本グループ・ダイナミクス学会 第68回大会	山口 洋典、矢守 克也、鮫島 輝美、Patricia Leavy
-----	-------	---	---------	------------------------	----------------------------------

4. 主催したシンポジウム・研究会等					
No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	第一回地域健康社会学研究センター研究会	朱雀キャンパス・Zoom	2022年8月	12名	人間科学研究所インクルーシブ医療社会サービスプロジェクト
2	第二回地域健康社会学研究センター研究会	衣笠キャンパス・Zoom	2022年10月	8名	人間科学研究所インクルーシブ医療社会サービスプロジェクト
3	第三回地域健康社会学研究センター研究会	衣笠キャンパス・Zoom	2022年11月	8名	人間科学研究所インクルーシブ医療社会サービスプロジェクト
4	第四回地域健康社会学研究センター研究会	衣笠キャンパス・Zoom	2023年2月	7名	人間科学研究所インクルーシブ医療社会サービスプロジェクト

5. その他研究活動（報道発表や講演会等）				
No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	サトウ タツヤ	TEA は質的探究に何をもたらしたのか？	立命館大学人間科学研究所年次総会シンポジウム	2023年1月
2	中村 正	書評 ジェンダー平等政策における男性問題の位置付けの必要性と課題 伊藤公雄ほか『男性危機？』	『図書新聞』第3585号	2023年4月

6. 受賞学術賞					
No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1	サトウ タツヤ	日本看護学教育学会	日本看護学教育学会第32回学術集会【優秀演題賞】発展部門	文化を創造する看護教員の力量形成プロセスの解明-複線経路等至性アプローチによる分析-	2022年8月

7. 科学研究費助成事業						
No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	早川 岳人	ライフコースを通じた現代日本人のための循環器疾患発症予測ツールの開発	基盤研究(B)	2020年4月	2023年3月	分担研究者
2	松田 亮三	多様化する社会における福祉体制の動態-日韓比較研究を通じた理論開発	基盤研究(B)	2020年4月	2024年3月	研究代表者
3	中村 正	脱刑事罰処理を支える「治療法学」の確立に向けた学融的総合的研究	基盤研究(A)	2019年4月	2024年3月	研究分担者
4	中村 正	男性性と暴力の臨床社会学的研究	基盤研究(C)	2019年4月	2022年3月	研究代表者
5	山口 洋典	市民性涵養の関係性モデルを軸とした地域参加学習カリキュラムと教授法の開発	基盤研究(C)	2018年4月	2023年3月	研究代表者
6	岡田 まり	コンピテンシーに基づくスーパーバイザー養成プログラムのモデル構築	基盤研究(B)	2019年4月	2024年3月	研究代表者

8. 競争的資金等(科研費を除く)						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
1.	早川 岳人	国民代表集団のコホート研究によるウィズ・コロナ時代の健康格差・健康寿命の規定要因の解明および健康調査のオンライン化の検討	厚生労働行政推進調査事業費補助金循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	2022年4月	2025年3月	分担研究者
2.	サトウ タツヤ	ウェアラブルを利用したウェルビーイングアルゴリズム開発	受託研究	2022年10月	2023年3月	
3.	サトウ タツヤ	人文社会科学の復興知に基づく標葉地域の循環型共同教育の実践		2021年6月	2026年3月	研究代表者

9. 知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人 区分	発明人 区分	出願番号	公開番号	登録（特許）番号	国
1	立命太朗	特許（国内）	本人単独	筆頭発明者	****	****	****	日本